神スキル『アイテム使用』で異世界を自由に過ごします3

雪月花
Setsugekka

Illustration
にしん

目次

第一使用　パラケルスス　7
第二使用　異世界ニジリアナ　53
第三使用　グラストン王国　96
第四使用　母との再会　139
第五使用　決戦、三虚兵　186
第六使用　最後のアイテム使用　238
エピローグ　家族　262

CHARACTER

登場人物紹介

ミーナ

エセ中華風の口調が
特徴的なリリムの姉。
ユウキの協力で新たな
魔王となった。

リリム

ガルナザークの
娘である魔人。
一見ちゃらんぽらんだが
『読心術』は強力。

ブラック

ユウキの眷属と
なった黒竜。
美少年の姿に化けるが、
千年以上生きている。

イスト

古城で暮らしていた
変わり者の魔女。
異界の門を開く研究を
していた。

品川裕次郎（しながわゆうじろう）

『通販』のスキルを持つ転移者。
他にも『炎熱操作』
『氷雪操作』をユウキから
貸し与えられている。

ガルナザーク

かつて勇者に倒された
最強の魔王。今はユウキの
ホムンクルスに
魂が宿っている。

安代優樹（あしろゆうき）

元サラリーマンの青年。
アイテムを『使う』と
様々なスキルを
手に入れられる。

ファナ

額に角を持つ
不思議な少女。
〝虚ろ〟という謎の力が
宿っている。

第一使用　パラケルスス

オレの名前は安代優樹（あしろゆうき）。
異世界ファルタールに呼び出された転移者だ。
当初、オレは呼び出した張本人の国王に捨てられる形で、この異世界に放り出された。
というのも、オレが宿したスキル『アイテム使用』が、アイテムを使用するだけのゴミスキルであると思われたからだ。
しかし、その理解は表面的なものに過ぎなかった。
『アイテム使用』というスキルは、使用したアイテムを吸収し、その特性を宿したスキルを手に入れるという、まさにチートスキルであったのだ。
その後、オレは辺境の古城に住む魔女イストと出会い、彼女の研究を手伝っていたところ、ファルタールとも違う異世界より、ファナと名乗る少女を呼び出してしまう。
オレとイストは、この世界に召喚してしまった罪の意識から彼女を保護するが、ファナの健気（けなげ）な

性格に、いつしか親のような気持ちを感じるようになっていた。
そんな中、ファナの体調に変化が訪れる。
それは彼女の右目に宿った謎の黒い穴――〝虚ろ〟と呼ばれるものの影響であった。
日に日に体力を奪い、ファナの命を削る〝虚ろ〟の症状をなんとかするべく、オレはこの異世界で出会った仲間達と共に、魔物と魔人が支配する領土『魔国』を目指した。
そこでは、『六魔人』と呼ばれる六人の魔王候補による権力争いが行われていた。
中でも第一位、第二位、第三位の実力を誇る魔人達は、かつてこの世界を支配していた魔王ガルナザークの子供達であった。
オレはまずその中の一人、第三位の魔人リリムを下し、彼女を仲間にすると、続けて第二位の実力を持つ魔人ミーナと同盟を結ぶ。
その後、魔人ミーナを魔王にするための試練に協力し、ついには第一位の魔人ベルクールを倒すことに成功する。
そうして魔国を統一したオレ達は、ファナを救う情報を得るために、かつての魔王ガルナザークが封印していた扉を開く。
そこで目にしたのは、ファナの右目に宿る〝虚ろ〟と全く同じものであった。
封印されていたその〝虚ろ〟の力をファナに与えることで、ファナの衰弱は回復した。

これでようやく平和が訪れ、オレ達の間にも平穏な時が流れる――と思った矢先、ファナの〝虚ろ〟に共鳴するように、異世界へと通じる扉が開かれる。
その扉から現れたのは、銀色の髪をなびかせる一人の魔術師。
男の名はパラケルスス・フォン・ホーエンハイム。
今ここに、ファナを巡る戦いが始まろうとしていた。

「パラケルスス……ホーエンハイムって……あいつがお前の父親だって言うのか？　イスト」
オレは突然目の前に現れた、手に真っ赤な石――『賢者の石』を握る銀髪の魔術師を見つめながら、隣に立つイストに問いかける。
「……ああ、その通りじゃ。儂の本名はイスト・フォン・ホーエンハイム。儂が長年異世界の門を研究していたのも、別世界に消えたあやつを捜すためじゃ」
告げられた真実に、オレは思わず息を呑む。
そうだったのか。だから、こいつはあれほど異世界の門を開こうと長年研究を……
「いや、だが待てよ。ってことはあいつは異世界に行ったんだよな？　なんで、この世界に戻ってきて……？」
「そのようなこと、儂にも分からぬ。ただ一つ分かっていることは――」

イストはチラリと、オレの腕にしがみついたままブルブルと震えているファナを一瞥する。
「あやつの目的が儂やお主ではなく、ファナじゃということじゃ」
「……」
確かに。ここに現れた瞬間、奴はファナを見て言った。「捜したぞ」と。
そして、もう一つ。奴はこうも告げた。「〝虚ろ〟は自分の物」だと。
つまり奴はファナを知っているどころか、ファナに宿っている〝虚ろ〟がなんなのかも知っている可能性が高い。
いや。それ以前に、もしかしたら元の世界でファナを奴隷にしていたのは、こいつかもしれない。
そう思わせるほど、オレの腕にしがみつくファナの震えは尋常ではなく、今にも泣き出しそうなほど顔は青ざめている。
そして、そんなファナを見つめるパラケルススの目は、異常なまでに冷え切っている。
まるで顕微鏡で虫を見つめているかのように、奴の目からはファナに対する一切の感情を感じられず、そこにはただ『物』としての価値しか映していなかった。
「ファナ。さっさと戻るぞ。どこに逃げようと、お前に戻る場所などない。お前は私の道具として、その〝虚ろ〟を献上するのだ。ただそのためだけに生まれたのだから、その役割を全うせよ」
「……ッ」

パラケルススの言葉に固まるファナ。
蛇に睨まれた蛙とはまさにこのことであろう。と同時に、今のセリフを聞くだけで、オレがこいつと敵対する理由には十分であった。
「待てよ。アンタがどこの誰で、イストの父親だか何だか知らないが、ファナを無理やり連れ去ろうとしても、そうはさせないぜ。この子は今やオレの大事な娘なんだ」
「……パパ……」
そう言って、オレはファナを庇うように一歩前に出る。
そんなオレを、ファナは顔を上げて見つめる。パラケルススも僅かに一瞥するが、まるで興味がないかのようにすぐに視線を外す。
「久しぶりだな、パラケルスス。よもや貴様と再びあいまみえるとは思わなかったぞ」
そんなパラケルススに声をかけるのは、オレと同じ姿をしたもう一人のオレ。
しかしその正体は、かつての魔王ガルナザークである。
今のガルナザークは、オレの『万能錬金術』によって生まれたホムンクルスを仮の器として宿っている。
そんなガルナザークを見やったパラケルススは、やはり先程オレに向けたのと同様の無機質な瞳のままで告げる。

「知らんな。生憎だが私は貴様のような存在など見覚えがない」
「……なんだと？」
それはオレの肉体に入っているためなのか、それとも本当にガルナザークの存在を忘れているのか、いずれにしろその発言は、プライドの高いガルナザークの逆鱗に触れるのには十分であった。
ガルナザークはこれまで感じさせたことのないほどの殺意をパラケルススに向けて飛ばすが、しかし、パラケルススはそれをそよ風のように受け流す。
やがて、僅かな溜息と共にパラケルススの視線はファナを捉える。
「ファナ。何度も言わせるな。私にはこのような場所で時間を無駄にしている暇はない。さっさと戻るぞ」
そうパラケルススが宣言すると、その右手に持っていた『賢者の石』が赤く輝く。
次の瞬間、オレの背後にいたはずのファナの姿が消え、それから間を置くことなくパラケルススの隣にファナが移動していた。
「なっ!?」
「!?」
ファナの一瞬の移動に戸惑うオレ達。
そんなオレ達の動揺にまるで興味がないのか、パラケルススはファナの右腕を乱暴に掴むと、そ

のまま背後にある黒いゲートへと近づく。
「！　ま、待てッ！」
オレは瞬時に右手に聖剣エーヴァンテインを生み出し、パラケルスス目掛けて駆け出す。
そんなオレに一拍遅れて、周囲にいたリリム、ミーナ、ブラック、裕次郎も同時に駆け出す。
一瞬でも奴の動きを止められれば、その隙にファナを奪還する。
それが可能なだけの力量があると、オレは確信していた。
だが、そんなオレ達を前にパラケルススはただひと言を告げる。
「……『三虚兵』、片付けろ」
『三虚兵』？　なんだそれは？
パラケルススが呟いたその単語に一瞬眉をひそめるオレ達。
だが次の瞬間、パラケルススを襲撃しようとしていたオレ達の体を、謎の衝撃が吹き飛ばした。
「がっ!?」
「ぐっ!?」
「なっ!?」
「がはっ!?」
見ると、そこにはいつからいたのか、全身を黒いローブに包んだ謎の連中が三人、パラケルスス

を守るように立っていた。
「な……なんだ、あいつら……？」
脇腹を押さえながら立ち上がろとするオレやリリム達を尻目に、その内の一人が羽織っていたローブを脱ぎ去る。
ローブの下から現れたのは、可憐な少女。
年齢はおよそ十四、五か。
雪のような白い髪と、まるで人形のような顔立ちに、一瞬寒気を感じた。
ノースリーブにスパッツという、おしゃれとはまるで無縁の格好は、機能性を重視した服装なのか。
そして、あたかもその証明のように、少女は左半身を前にして格闘術のような構えを取ると、起き上がりかけていたリリムの眼前へと一瞬で移動する。
「なっ!?」
その動きが予想外であったのか、リリムが防御するよりも早く少女の拳が腹に入り、間髪容れず顎下にも拳が叩き込まれる。
「がはッ……！」
「リリム！」

空中に吹き飛ばされるリリムを見て、すぐさま少女の背後目掛けて駆け出すミーナ。
しかし、死角から駆け寄ったにもかかわらず、少女はまるでそこから攻撃が来ると分かっていたかのように振り向きざまに足蹴りを放ち、ミーナがカウンターを食らう。
一連の光景を見ていた他のメンバー達もすぐさま援護に入ろうとするが、それよりも残る二人の敵の行動が早かった。
「ははは、おいおい。この世界の人間ってのは随分と野蛮だなぁ。少しはお行儀よくできないのかぁ？　それともオレ様のギグが聞きたくてテンション上がってんのかぁ？　なら、ちょうどいいぜ。ついさっき出来た新作を特別に披露してやるぜ！」
そう言って、黒ローブの一人が背負っていたらしき楽器を両手に取る。
あれは……ギターか？
オレの知っている地球のものとは少々構造が異なるが、間違いなさそうだ。
そんなものでどうするのかと戸惑っているオレをよそに、男が楽器の糸を爪弾くと、それは明らかに通常とは異なる旋律を鳴らした。
「イヤハアアアア――――――――！！」
「……ッ、ぐあああああああああぁぁ！」
「な、何この音……!?」

「うあああああああああ！」
「頭が……割れる……！」
男の楽器が奏でる音は、まるで振動波のように伝わってオレ達全員の鼓膜に響き、脳をグラグラと揺さぶってきた。
それは鈍器で頭を殴られるかのような衝撃。あるいはそれ以上。
三半規管の機能が乱れ、目の前の景色がぼやけ、立っていることすらできなくなってきた。
オレだけでなく、魔人であるミーナやリリム、ガルナザークですら影響を受けているようで、全員が片膝をつき、まともな動きを封じられている。
一方のパラケルスス達は、この音の中でもまるで平気な様子で立っていた。
おそらく、仲間には影響がないように能力の標的をオレ達に絞っているか、事前にこの能力を受けない何かを施しているのだろう。
いずれにせよ、これはまずい状況だ。
オレは両手で耳を押さえながらなんとか立ち上がるが、その隙を逃さず、黒ローブの最後の一人がオレ達に向けて手をかざす。
「『重力操作』」
ローブの下でそんな男の声が呟いた瞬間、今度は感覚だけでなく、文字通り体を押しつぶすプ

レッシャーを受ける。
「がっ！」
「う、ぐッ……！」
「あああああッ！」
まるで見えない巨人に踏みつぶされているかのようだ。
地面にヒビが入るほどの圧力に、オレをはじめ味方全員がその場でうつ伏せに倒れ込む。
「ははははー！　どうしたどうしたー！　オレ達のギグが激しすぎて、思わずひれ伏しちまったかー？　いいねいいねー！　そうやって観客が楽しんでくれると、オレ達も最高にハイってな気分だぜー！！」
オレ達が倒れると、更に激しくギターの音が掻き鳴らされる。
「うあああああああああああ！」
「お、おのれ……！」
その爆音に、裕次郎やブラックはたまらずのたうち回る。
見れば、二人の耳からは血が流れていた。おそらく、あまりの衝撃で鼓膜をやられたのだろう。
それに構うことなく男は演奏を続け、更なるダメージを与えてくる。
「ぐ、ううううぅ……！」

オレは再び立ち上がろうとして四肢に力を入れるが、それをさせまいとしてオレ達を縛る圧力が更に重くなるのを感じる。
おそらく、最後のローブの男は重力を操作しているのだろう。
しかも、その圧力は半端なものではない。魔人や魔王の称号を持つリリム、ミーナ、ガルナザークですら、その場に蹲ったまま立ち上がれないほどの能力。
自分達の力に自惚れるわけではないが、少なくともオレ達を苦もなく押さえつけるこいつらは、明らかに異常な存在であった。
唯一動かせる視線を前方に向けると、そこにはパラケルススに腕を掴まれたまま泣き叫ぶファナの姿があった。
「パパー！！」
涙を流しながら必死でオレに助けを懇願するファナ。
冗談じゃない。
折角、命を救ったところだというのに、こんな連中にファナを奪われてたまるものか……！
オレは歯を食いしばり、泣き喚くファナを救うべく、更に両手両足に力を入れる。
だが、耳に響く音圧と体を押しつぶす重力の前に、オレの体は思うように動かなかった。
「もうそこまでいいだろう。このような奴らに関わっている時間が惜しい。戻るぞ、セレスト、

ボイド、メルクリウス」
「はい」
「へっ、なんだよなんだよ。今日のギグはこれでおしまいか。ったくやわな観客だぜ」
「……」
セレスト、ボイド、メルクリウスと呼ばれた黒ローブの三人は、その場で身を翻すと、パラケルススの傍に開いていた黒いゲートの向こうへと進んでいく。
そして、最後にファナの腕を掴んだままのパラケルススがゲートの奥へと消えていくと、ゲートの向こうよりファナの絶叫が響く。
「パパーーーーーー！！」
それはかつて聞いたことがないほど悲痛なファナの叫び。
魂に訴えかけるような慟哭の声。
瞬間、オレは自身を襲っている重力の圧を打ち破ると、反射的に黒いゲートの方へと飛び出した。
「ファナーーーー！！」
ゲートはすでに消えかけている。あと数秒も持たずに、オレ達のこの場所と連中が向かった先の世界を繋ぐ門は閉じられる。そうなれば、二度とファナと会うことはできない。
そう考えた瞬間、立ち止まるなんてことは一切できなかった。

仮にこのゲートの向こうから二度と戻れなくなったとしても、ここでファナを見捨てるよりは遥かにマシな選択だと、瞬時にそう判断していた。冷静に判断できる時間があったとしても、同じ選択をしただろう。
そして、そんなオレと同じ選択をした奴らは他にもいた。
「愚か者が。たった一人で連中に太刀打ちできるとでも思っているか。相変わらずの単細胞よな」
「にゃははは！　お父様とユウキならこう行動すると思っていたのだ。私もやられっぱなしでは悔しいので一緒についていくのだー！」
見ると、ガルナザークとリリムがオレの両脇で共に駆け出していた。
「お前ら……」
おそらく、あの重力場を振り切って迷わず駆け出せたのがこの二人だけであったのだろう。
いずれにせよ、オレは二人に感謝しながら、共に黒いゲートの中へと潜る。
そして、オレの意識はそのままブラックアウトした。

◇　◇　◇

「ユウキ……リリム……それにガルナザーク……」

ユウキ達が突入すると同時に、黒いゲートは完全に閉じられる。
残されたイスト、裕次郎、ブラック、ミーナはなんとか立ち上がるが、先程の出来事を受けて誰もが苦々しい表情をしていた。
「くそっ、オレ達にもっと力があればユウキさんの後を追えたのに……！」
最初にそう吐き捨てたのは裕次郎であった。
それに同意するようにブラックも頷く。
「確かにその通りだ。連中の力に翻弄されて、我々は戦力にすらなれなかった。主様の窮地にて助けにすら入れぬとは……眷属として失格だ」
彼らが動けるようになったのは黒いゲートが閉じた直後。即ち、連中の力が完全に消え去ってからであった。
あの場で動けたのは、ユウキに加え、魔人リリムと魔王ガルナザーク。そしてやはり魔王の称号を持つミーナであったが、彼女だけは先の三者が動いた瞬間、僅かに逡巡した。その一瞬の内に、ゲートは閉じてしまった。
「……それを言うなら私が一番失格アル。あの瞬間、私は門の向こうへ行けば、こちらへ戻れぬかもしれないと一瞬躊躇ってしまったアル」
悔やむように告げるミーナ。

しかし、すぐさまイストがフォローする。
「いや、お主の判断は正しい。今やお主はこの魔国を支配する事実上の魔王じゃ。そんなお主が今いなくなれば、魔国は再び統治者を失い、混乱の渦中に逆戻りじゃ。そうなれば、折角訪れた魔国の平穏や人間国との和平すらなくなる。それだけはしてはならぬ。お主の判断は間違っておらぬぞ。魔王ミーナよ」
「……確かにそうアルが……けれども、私はユウキにたくさん助けられたアル……なのに、結果としてそのユウキを見捨ててしまったアル……」
理性では自分の選択が間違っていないと思いつつも、感情の面で己を許せず、爪が食い込むほど拳を握り締めるミーナ。
とはいえ、その想いはイスト達も同じであり、あの時実力が足りなかったばかりに動けなかった己こそが、と自分自身を責めていた。
「いずれにせよ。今、我々にできることは一つじゃ。なんとかして連中が消えた世界に我々も行く。その手段を見つけるのじゃ」
「でも、イストさん。そんなことが可能なんすか？」
「確かにな。そもそも連中がどこへ来たのかも分からんのだぞ」
イストの意見に疑問を投げかける裕次郎とブラック。

それに対し、イストはすぐに首を横に振る。
「それならば安心せよ。先程連中が消えた魔力の渦……時空の歪みはまだこの場所に残っている。この場所を起点として、異世界の門を開く術式を行えば、連中が消えた先の世界に繋がるはずじゃ」
「な、なるほどっす！」
イストの説明に納得する裕次郎。
しかし、それを聞いたブラックは何やら神妙な表情をする。
「異世界の門を開く術式、と言ったな、小娘。それはもしや以前、あの娘――ファナを呼び出すことになった例の儀式のことか？」
「そうじゃ」
ブラックの問いかけにすぐさま頷くイスト。
それを聞いて、ブラックはますます難しい顔をする。
「となると、厄介だな。あれをするには『転移結晶』が必要なはずだろう？」
「……その通りじゃ」
「なんすか、その『転移結晶』って？」
聞き慣れぬ単語について質問する裕次郎。
それに答えたのはブラックであった。

「『転移結晶』とは、高い魔力を宿した自然物だ。普通は『転移石』と呼ばれるもので、これに魔力を込めると使用者がこれまで訪れたことのある場所へ転移する力がある。『転移結晶』はその上位互換で、長い年月をかけて『転移石』が巨大な結晶に成長したものだ。だが、そこまで巨大な結晶となるには数百年が必要だ。ただでさえ『転移石』自体が稀少な上、それが巨大に成長したものが必要となると、現状我々に打つ手はない」
「そんな……！」
ブラックの説明にショックの色を隠せない裕次郎。
そうして、もはやこれまでかと諦めかけた三人に、ミーナが救いのひと言を告げる。
「『転移結晶』ならば、私が持っているアル」
「え？」
「なんじゃと？」
「ほ、本当か⁉」
思わぬ発言に、一斉にミーナの方へ顔を向ける三人。
するとミーナは右手を地面に向け、魔力を放つ。
一瞬の閃光の後、そこには目も眩むほどの光を放つ『転移結晶』の姿があった。
「な、こ、これは……⁉」

「本物じゃ……これは紛れもない本物の『転移結晶』じゃ……！」
「す、すごいっす！」
突如現れた『転移結晶』を前に驚きを隠せない三人に、ミーナは胸を張って答える。
「ここは魔国。魔物や魔人が支配する魔境アル。そこには当然、人間国では手に入らない宝や魔力を宿した自然物も多くあるネ。この『転移結晶』もその内の一つアル。とはいえ、この魔国においても『転移結晶』は貴重な自然物アルし、私のいたイゼルが保管していた宝の一つアル。けれども、お前やユウキ達に対し、私は返しきれない恩があるネ。それを返せるなら『転移結晶』の一つや二つ、遠慮なく受け取れアル」
そこには、以前自分が受けた恩を返したいという想いと共に、異世界に行ってしまったユウキを助け出してほしいという想いが乗っているのを、イストは感じた。
「ミーナ……すまぬ。お主からの『転移結晶』、決して無駄にはせぬぞ」
「任せたアルよ」
イストからの返答を聞き、頷くミーナ。
そのままイストは、『転移結晶』を先程ユウキ達が消えたゲートがあった場所に置くと、懐から取り出した大きめの筆で地面に魔法陣を描く。
それは単純な字形だけでなく、様々な地方の言語、あるいは古代文字も交えた不可思議な陣形で

あった。それを見ていたブラックは、一見デタラメに思えるその描き方の中に、ある一定の法則があることを感じ取った。更には、通常の魔術師であればこの陣を描くだけでも数週間の労力が必要となることにまで気づく。
「魔女娘。門を開くための術式の完成にはどれくらいかかる？」
「『転移結晶』がある以上、あとは術式を描き、それに魔力を注げば完成じゃ。しかし、問題はその術式じゃ。今現在我々がいるこの世界の位置、更にはユウキ達が消えた異世界の波動、その位置を特定し、数式を導き出すのに時間がかかる。少なくとも一週間は必要じゃな」
「一週間か……」
それを早いと取るか遅いと取るか。
ブラックも裕次郎も判断に迷った。
無論、普通の魔術師の観点から言えば、この一週間というのは異常な速さである。
しかし当然、ユウキ達が向かった世界でも同じだけの時が流れると考えるべきだ。
そうなった場合、最悪その間にユウキ達の命が奪われる可能性もあるかもしれない。
行けるのなら一分一秒でも早く行きたい。それがこの場にいる全員の本音であるが、かといって無理にイストを急かすことなどできない。
この異世界の門を開く術式を構築できるのはイストだけであり、その彼女が宣言した一週間とい

う数字も、自身が一切の休憩を取らず不眠不休で行った上での時間であろう。
なればこそ、そんな彼女を急かすことはただの子供の癇癪と同じであると、ここにいる誰もが理解できている。
しかし、そんな冷静な思考とは裏腹に、焦る気持ちが皆の顔に表れていた。
「……せめて、あと一人……儂と同じくこの異世界の門に詳しい術師がいれば……」
思わずそう呟くイスト。
しかし、そもそも異世界の門を開く研究というのは、魔術師の中でも特に高度の知識と技術を必要とするもの。
そして、イストのような深い経験と、長年積み重ねてきた魔力が合わさってこそ可能なのだ。
生半可な知識や魔力を持つ魔術師を連れてきたところで、逆にイストの足を引っ張ることにしかならない。
もっと言えば、イストと同じ長寿の魔女族でもなければ、彼女と同じ位置には立てない。
だからこそ、己のボヤキがただのないものねだりの愚痴でしかないことは、イスト自身がよく理解していた。
しかし、そんなないものねだりの愚痴に答える者がいた。
「はーい。それならうちがいるしー」

「……は？」
突然、背後からかかった声にイストは振り向く。
すると、そこには部屋の扉を開けた一人の女性の姿があった。
そして彼女を目にした瞬間、イストはらしくもなく瞳の端に涙の粒を浮かべる。
「うぃーす、久しぶりーみたいなー。イスト姉様ー」
「リア……なのか……？」
その相手とは、アゼル領にて第五位の魔人としてベルクールに付き従っていたイストの妹、リアであった。
思わぬ人物の登場に驚くイストだったが、すぐさま浮かんだ涙を誤魔化すように袖口で目の端を拭うと、今度は己に近づく妹の姿をマジマジと凝視する。
「……偽物、ではないようじゃな」
「当たり前っしょー。つーか、勝手にうちのこと死人扱いしてほしくないみたいなー」
イストの問いに対し、以前会った時と同様に茶化すように答えるリア。だが未だその存在が信じられないのか、今度はイストの隣にいたミーナが質問を投げかける。
「しかし、どういうことアルか？　お前のいたアゼル領は、私の兄ベルクールによって一人残らず吸収されたはずアルよ。実際、ベルクールは真っ先にお前を吸収したと言っていたアル」

「あー、それねー」
その問いにどう答えたものかと、頭を掻きながら「うーん」と悩むリア。
「……まあ、うちにも詳しいことはよく分かんないんだよねー。気づいたらアゼル領の地下深くで目が覚めたっていうかー。あー、でも吸収されたのはマジっぽいよー。うちのスキル『予知』はベルクール様に取られたし、あと力の大半も奪われたから、魔人としての力は残ってないみたいなー」
「ふむ」
リアの説明を聞いて、おもむろに考える仕草を見せるイスト。
やがて、何らかの考えに至ったのか、頷いた後に語り出す。
「元々お主は魔物ではなく、儂と同じ魔女族じゃ。儂らは半分が魔物のような存在じゃが、残り半分は人間。ということはベルクールには魔物の部分を吸収され、残った人間の部分が生き残ったと考えられるのではないか？」
「かもねー」
イストの説明にリアは軽い調子で同意する。
己の体の事情にもかかわらずそんな態度でしかない妹に、イストは呆れつつもどこか嬉しそうであった。
「……あるいは兄上が、お前だけでも生かしたのかもしれないアルな。魔国の生まれではない部外者のお前の命を奪うことを、最後の最後で躊躇ったのかも……」
ボソリと呟かれたミーナのひと言で、それまで砕けた態度だったリアが少しだけ寂しそうな雰囲気を醸し出したのに、その場にいた者達は気づいた。
果たして真実がどうであったのかは、今となっては分からない。
「いずれにせよ、リア。お主が手伝ってくれるというのなら、異世界の門を開く作業も数日で終わるかもしれぬ。無論、手伝ってくれるのじゃな？」
「おけまるー。つーか、当然っしょ。うちの目的もイスト姉様と同じで、父様を追いかけたいってやつだったしー」
姉からの問いにリアは笑顔で答え、手を差し出す。
突然の握手に少し戸惑うイストであったが、「やれやれ」と愚痴をこぼした後でその手を取り、ここに二人の魔女姉妹による異世界の門を開く術式の作業が始まるのだった。

◇　◇　◇

廻る。廻る。廻る。
そこは上下左右の感覚がない奇妙な空間だった。

自分がどこへ向かっているのかまるで分からない。
ただその中で、体がねじれるような、魂がどこか別の場所へ行ってしまうような奇妙な感覚だけが続いていた。少しでも流れに逆らったら、体も魂も引き裂かれてしまいそうな、そんな感覚。
オレはすぐ傍にいるであろうリリムとガルナザークの気配を感じながら、まるで大海に発生した大渦に呑まれたかのように廻り続け、果ての果てへと向かう。
そんな奇妙な感覚が何分、何時間、あるいは何日と続いたか分からなくなった頃、不意に視界が開けた。
それと同時に、周囲に渦巻いていた奇妙な感覚が途切れ、オレは地面に降り立ったのを感じる。
「……ここは？」
ゆっくりと顔を上げると、そこに見えたのは一面の荒野だった。
荒れ果てて、草木の一本も生えていない、西部劇の舞台のような光景。
見渡す限りの岩山に囲まれた涸れた大地。
砂風が舞う、そんな寂しい世界にオレは立っていた。
「フンッ、随分と殺風景な世界よな」
「ガルナザーク」
ふと隣から聞こえた声に反応し、そちらを向くと、いつにも増して不機嫌なガルナザークの姿があった。

その表情は、眼前の荒れ果てた大地に対するものであったのか、あるいは先程のパラケルスス率いる『三虚兵』との戦いによるものなのか、それともパラケルススに対する不満、憎悪であるのか。
いずれにせよ、ガルナザークの不満はひしひしと伝わってきた。
「にゃはははは、ここがあの連中がいた世界なのかー？　少なくとも私達のいた世界にこんな殺風景な場所はなかったはずなのだー」
と、同じくこの光景を見ていたリリムが、いつにも増して明るい口調でそう告げる。
なるほど。リリムがそう断言する以上、やはりここはあのパラケルスス達の世界なのだろう。
もっと言えば、ファナが本来いた異世界。
異世界ファルタールとは全く異なる別世界に、オレは一瞬、怖気づいたかのように体が震えたのを感じた。
ははっ、まったくらしくないぜ。
これまでも突然呼ばれた異世界になんだかんだと順応し、そこで手に入れたチートスキルで、黒龍をはじめ魔人や魔王まで倒してきたというのに。今更、たかがまた別の異世界に来たくらいでビビるとはな。
以前はともかく、今回のこれは、オレが自分自身で選び、飛び込んだ結果だ。

ファナを、オレの大事な家族を救う。
その選択に迷いなんかない。
オレは改めて、自らにそう誓約する。
「随分と肩に力を入れているな。無理もない。お前がこれから相手にしようとしている相手は、魔人や魔王といった存在とはまるで別格の存在なのだからな」
「え？」
しかし、そんなオレに突然、ガルナザークが声をかけてくる。
「魔人や魔王とは別格って、それってどういう意味だよ？」
「言葉通りの意味だ。奴を既存の存在と同じように考えないことだ。そもそも貴様はあの娘を救出するつもりでこの世界に来たようだが、一体どうやってあの娘を助け出す気だ？」
「そりゃ、あのパラケルススって奴を倒して――」
「無理だな」
オレが答えるより早くガルナザークは切り捨てる。
「無理って……どういうことだよ!?」
「言葉通りの意味だ。貴様がどう頑張ったところであの男は倒せぬよ。それよりも、なんとかあの男の隙をついて娘の奪還を考える方が現実的だ。とはいえ、それすらも実現不可能と言えるな」

「なっ、お前、今回どうしたって言うんだよ？　なんでそんなに否定的なんだ」
「にゃははは！、確かにそうなのだー。いくらなんでもそれは言いすぎなのだー。さっきは油断したけれど、私やユウキ、それにお父様がいれば勝ち目の一つや二つくらいは……」
「やれやれ、何も分かっていないな。小童達は」
オレやリリムが言い返そうとすると、ガルナザークはわざとらしく溜息を吐いて肩をすくませる。
「言ったはずだぞ。奴の力量は魔人や魔王、勇者などという枠組みでは推し量れぬ領域にある。仮に今ここに我に加えてベルクール、ミーナ、リリムら『六魔人』が結集したとしても、奴には届かぬ。それだけは断言できる」
「だから、それがなんでだよって言ってんだよ」
理由を問うオレに、ガルナザークは驚くべき真実を答えた。
「かつて全盛期を誇った我が、奴に敗れたからだ」
「……なん、だと……？」
そのひと言に、オレとリリムは言葉を失った。

◇　◇　◇

――五百年前、ある魔王が魔国の中心にいた。
かの者の名はガルナザーク。
歴代最強の魔王として魔国に君臨せし者。
かつて、数多の人間国の英雄、勇者、戦士達がその魔王を倒すべく挑んだ。
だが、誰ひとりとしてそれは叶わなかった。
魔王はただそこにあるだけで、他の存在を圧倒した。
魔王はただ息を吸うだけで、いくつもの命を奪った。
魔王はただ腕を振るうだけで、地割れを起こし、天を割いた。
そんな人知を凌駕する化物を相手に、人間国の者はただ怯え、それが気まぐれに人間国を支配、あるいは破壊する時を待つのみとなった。
そうした最中であった。
人間国にて、異世界の門を開き、異なる世界より強力なスキルを宿す逸材、資質を持つ者を呼び出す転移の術式が生まれたのは。
人間国の者達は、残されたその最後の希望にすがり、転移の儀式を行った。
そうして呼び出されたのが、後に魔王ガルナザークを倒した勇者であった。
だが、人々は知らなかった。

勇者が魔王を倒した顛末の伝承は、あくまでも表面的なものに過ぎず、当の勇者の視点によってのみ語られていたことを。
確かに、召喚された勇者の力は絶大であった。それまで人間国に存在したあらゆる英雄、王を上回るほどの力とスキルを宿していた。だが、それでもなお、かの最強の魔王には届かなかったことを。
では、果たして如何にして魔王ガルナザークは倒れたのか。
これは、人間界どころか魔国にすら伝えられなかった、魔王本人のみが知る真実。
あの時代、あの世界において、唯一かの最凶の魔王に匹敵し得た――否、存在そのものを超越していた〝異端者〟の始まりの記録である。

「……何者だ」
暗闇の中、一人の男の姿が現れる。
それと対面するのは、長い漆黒の髪に、同じく夜よりも暗い深淵の如き色の衣装を身に纏った、魔王ガルナザーク。血のように赤い玉座に腰を据えた彼は、闇に支配されたその空間の扉を開ける、何者かの気配に気づいた。
「お初にお目にかかる、魔王ガルナザーク。私の名はパラケルスス・フォン・ホーエンハイムと

いう」
それは夜に浮かぶ月のような男であった。
玉座に座った魔王が黒を象徴とする男ならば、こちらはまさに正反対。
あらゆる色を塗りつぶす黒の中に現れた、いかなる色をも受け付けない純白だ。
一瞬、女に見まごうほどの美貌は、見る者が見れば羨望以上に恐怖を感じるであろう。
そんな純白の男パラケルススの出現に対し、黒の魔王ガルナザークは眉一つ動かすことなく、見下した態度のまま声をかける。
「パラケルススだと？　知らんな、そのような男など。もしや貴様が例の異世界より召喚された勇者とやらか？」
「いやいや、生憎私はそのような存在ではない。まあ、ただの錬金術師と思ってくれ」
「ほお？」
自らを目の前にしてそのような軽口を叩ける存在を、ガルナザークは久しく見ていなかった。
魔王のプレッシャーに押しつぶされることなく、ここまで飄々とした態度を取れるということは、少なくともこの男の実力は己に近しいところにあるのだろう。
そう判断するに十分すぎる男の不気味な雰囲気に、ガルナザークは僅かながら戦闘意欲が刺激されるのを感じた。

「よかろう。貴様が勇者だろうと錬金術師だろうと、どうでもいい。我の前にこうして現れたということは、我に殺される覚悟があるということなのだろう」
「いや？　私は殺されるつもりなど毛頭なく、むしろあなたを実験台に、私の目的を次の段階に進めたいと考えているのでね」
「なに？」
パラケルススが告げた内容に、ガルナザークは不快げに眉をひそめる。
今まで、彼に対してこのような大口を叩いた者などはいなかった。
彼にとって他者は測るものであり、自らが測られるなど論外。ましてや、パラケルススはガルナザークを目的のための過程に過ぎないと告げた。
それは、この世界を支配する魔王に対する、何よりの侮辱である。
「では、早速私の実験に付き合ってもらおう。魔王ガルナザーク。あなたほどの強者であるならば、私の目的の礎となることも可能だろう」
「ほざいたな、人間が。我を踏み台にするだと？　貴様のその自惚れ、墓の下にて存分に後悔するがいい」
そうして始まった戦いは、まさに魔国の歴史上でもかつてない死闘。
かつて、数多の魔人達が己こそ魔王に相応しいと、王の座を懸けて血で血を洗う争いを続けた。

無論ガルナザークもその一人であり、同時代に生まれた数多の魔人を屠り、玉座に就いた。
そこには、己の命の危険を感じた戦いもあった。
確かに、これまで戦ってきた相手の中にも強者はいた。だが、それはあくまでも己の実力で測れるレベルの相手であり、想定内の力の持ち主に過ぎなかった。
故にガルナザークは、本当の恐怖というものを知らずに生きてきたと言える。
なぜなら『恐怖』とは未知から来るもの。己の認識の埒外、理解不能なものから訪れる感情だからである。
そして、ガルナザークはパラケルススとの戦いを通して初めて『恐怖』を知ることとなる。
それは、数百年にわたる彼の生に訪れた初めての感覚、理解不能な現象、あまりに理不尽な『何か』であった。
「ぐうううううううぅぅ！」
苦悶の声が木霊する。
魔国の中心、魔王の玉座の間で響いた未だかつてない雄叫びに、国中の魔物達が怯えた。
ガルナザーク自身、己が発した声と、初めて感じる『恐怖』に驚きながら、己が一歩下がったことを自覚した。
敵を前にして後ろへと下がる。

それは魔王として、君臨者としてこの上ない恥辱である。ガルナザークは、湧き上がる恐怖を憤怒によって抑え込んだ。
「き、貴様ぁ……！」
「ふむ。どうやら実験は成功のようだな」
常人であれば浴びただけで即蒸発するような殺意の視線。しかし、パラケルススはそれをまるでそよ風のように受け流し、この戦いによって生じた空間の亀裂――次元の裂け目を興味深そうに覗いている。
「やはり強大な力があれば、異世界の門を開けるようだ。本来ならばそのための術式と『転移結晶』が必要だが、生憎私にはそのようなものを探している暇はない。そして、私にはすでにこの『賢者の石』がある。これを使えば、巨大な力の衝突によって起こるエネルギーを門を開くのに利用することが可能。あとは、私の研究に必要な『最後のパーツ』を調達するだけだ」
そう呟くパラケルススの瞳にはすでにガルナザークの姿は映っておらず、つい先程まで激闘を繰り広げていた相手に背を向け、開いた裂け目へと歩き出していた。
「待て……！　貴様、どこへ行くつもりだ。よもや、この魔王ガルナザークとの決着をつけぬまま、ここから去るつもりか……！」
無論、そのようなパラケルススの行動を看過する魔王ではない。

先程まで感じていた恐怖は薄れ、今やこの謎の男に与えられた恥辱を拭うことに意識を傾けていた。

しかし、そんな魔王からの殺意に対し、パラケルススは涼しい態度のまま答える。

「無理はしない方がいい。あなたに打ち込んだ〝それ〟は、生半可な傷とは異なるのだから」

パラケルススの指摘にガルナザークは思わず踏みとどまり、傷を受けた己の右腕を見つめる。

そこには、腕を蝕む奇妙な痣が広がっていた。

いや、それは傷や痣といった概念とは異なっていた。魔法的な現象にも、寄生的な生物にも当てはまらず、長き生の中で数え切れない敵と戦ってきたガルナザークが初めて目にする、全く未知の何か。

そしてそれこそが、彼が生まれて初めて感じ取った『恐怖』の形そのものでもあった。

「貴様……これは一体……なんだ……？」

自らの腕を侵食し、己の体力、命、寿命、それら全てを貪欲に吸い取るかのように蠢くそれを指しながら、ガルナザークは問う。

「〝虚ろ〟」

魔王からの問いに、錬金術師はただひと言答えた。

「私はそう呼んでいる。とはいえ、それは私が目的とする〝到達点〟の欠片に過ぎない。今はまだそのような不完全な形での創生しか行えないが、いずれ私はそれを『完成』へと近づける」

「なん……だと……？」

パラケルススが告げた内容にガルナザークは戦慄する。

それもそのはず、自らを追い詰めた代物が不完全なものだと知って恐怖しない者などいない。

ましてや、これが一体なんなのか理解すらできぬガルナザークにとっては、青天の霹靂に他ならない。

「しかし、あなたは誇ってもいい、魔王ガルナザーク。普通ならばその〝虚ろ〟を打ち込まれた時点で、即座に存在が消滅してもおかしくはない。いやはやさすがは最強の魔王様だ」

「……貴様ッ」

パラケルススの挑発とも取れるセリフに、ガルナザークは自らの腕を蝕む〝虚ろ〟を睨みつける。

たかだかこのような理解不能な何かに、己がこれ以上、恐怖してたまるものか。

「おおおおおおおおおおおおおおおおッ！」

ガルナザークは咆哮と共に自らの右腕を切断。

瞬間、〝虚ろ〟による恐怖という名の鎖は断ち切れ、ガルナザークは自らの矜持を汚した憎むべき敵の心臓目掛けて刃を振るう。

しかし、それが届くよりも早く、パラケルススの姿は次元の穴の向こうへと吸い込まれた。

「くッ！」

「では、ご機嫌よう、魔王ガルナザーク。あなたとの戦い、実に有意義な、私の役に立つ代物だったよ」

虚空より響いたパラケルススのそんな言葉と共に、次元の裂け目は静かに消失する。

後に残されたのは、ガルナザークと地面に転がる彼の右腕、そしてその腕を呑み込んでまるで生き物のように鳴動を繰り返す〝虚ろ〟のみだった。

◇　◇　◇

「その後、我は〝虚ろ〟を封印し、そして傷が治らぬ内に異世界の勇者とやらがやってきた。あの時、パラケルススの襲撃さえなければ、我があのような奴に負けることはなかった。まったく、今思い出しても腹立たしい出来事であった」

ガルナザークはそう、オレとリリムに過去を打ち明けた。

そうか。だから、こいつは〝虚ろ〟のことを知っていたのか。

いや、それだけではない。

あれほど強大な力を持ったガルナザークを、かつての勇者はどうやって倒したのか。そこを前から疑問に思っていたが、その答えはあまりに予想外であった。

おそらくは本人の言う通り、ガルナザークが万全の状態であれば、その勇者と戦って負けることはなかったのだろう。だが、直前にパラケルススの襲撃があり、〝虚ろ〟によるダメージが回復しない内に襲われれば、確かにガルナザークとはいえ敗れても仕方がない。そして本来の実力による結果ではないのだから、尚更無念であったはずだ。

「それでノーライフキングになったのか」

「当然よ。あのような不本意な結末で終わってたまるものか。我がノーライフキングとなって復活しようとした目的は、我を倒した勇者の血族であるヴァナディッシュ家への復讐の他にもう一つ――あのパラケルススの奴を見つけ出し、葬ることだ。それを為すまでは死んでも死にきれぬわ」

ガルナザークは忌々しそうに吐き捨てる。

確かにそうした経緯があるなら、これほどのパラケルススへの憎しみようも分かる。

しかし、こいつも案外ねちっこい性格だなぁと少し呆れるが、そんなオレの気配を感じ取ったのか、ガルナザークがいつにも増してジト目で睨みつけてくる。

「……貴様、今我がねちっこい性格だと思ったか？」

「え？　いや、そんなことないが」

「本当か」
「うんうん、本当本当」
「にゃははは！　大嘘なのだー！　ユウキはたった今お父様のことを、こいつねちっこい性格だなーとモロに貶していたのだー！」
と、オレのポーカーフェイスも虚しく、隣にいたリリムがばらす。
しまった。そう言えば、こいつは読心術を持っていたんだった。
迂闊なことを考えるんじゃなかった。
「あー、まあ、それよりもさ、さっきの話を聞くと、お前って魔王の時は人間の姿だったの？　オレ、てっきりノーライフキングのままの姿だと思っていたよ」
なんとか話を変えようと、オレは思いついた話題を口にする。
ガルナザークはそれに対して鼻を鳴らしながら答える。
「フンッ、何を当たり前のことを言っている。あのような亡霊の姿が本当の姿なわけがないだろう。言っておくが、全盛期の我は姿もさる事ながら実力もノーライフキングの時とは比較にならぬわ」
「にゃははは！、確かにそうなのだー。私もおぼろげながら覚えているけれど、お父様の若い頃の姿はかなりのイケメンだったのだー」
ほお、そうだったのか。

全盛期のガルナザークか……一体どんな姿で、どれほどの実力を持っていたのか気になるところだ。
とはいえ、問題はその全盛期のガルナザークですら、あのパラケルススと名乗った錬金術師には及ばなかったという事実。
確かにガルナザークの言う通り、奴を倒すのではなく、なんとかしてファナを取り返すことを第一に行動した方がいいかもしれないな。
「それにしても、我を利用してまで来訪したかった世界が、このような何もない世界とはな。あやつも何を考えているのやら」
「にゃははー、確かにー。案外、誰の邪魔も入らないところで研究とやらをしたかったのではないのかー？」
「まあ、今はとりあえず街を捜して歩き回ろう。異なる世界とはいえ、さすがに人や文明は存在するはずだろう」
そんな風にして、オレはガルナザーク達と共に移動を開始するのだった。

あれからしばらく、オレ達は砂嵐が吹き荒れる荒野をあてもなく彷徨っていた。
途中、何度かこの世界の生き物らしき鹿や馬のような動物とすれ違った。

少なくともこの世界にも生命は存在しているようであり、地面に転がる何かの武器の破片や鉄くずなども見かけた。
それにここがファナの世界だとするなら、やはり彼女と同じ種族、人間がいるはず。
ということは、何らかの文明が存在するのだろう。
つまり今のオレ達がなすべきは、人のいる街などを見つけ、ここがどのような世界なのか調べること。
その上で、パラケルススの所在を捜すのだ。
そうして、荒野を歩き続けること更に一時間。オレ達は砂嵐の向こうに見える無数の影を目にする。
「にゃはは～！　ユウキ、お父様～！　向こうに何か見えるのだ～！」
それに真っ先に気づいたリリムがテンション高く、そちらへと近づく。
オレとガルナザークもリリムを追いかける形で進んでいく。
そこにあったのは、小さな集落であった。
周りを岩山で囲まれた場所に、布や木で出来たテントらしき建物がいくつか建てられており、そこに暮らす人々の姿が見えた。
「どうやらこの世界にも人間はいるようだな」

ガルナザークの言葉に頷いて、オレ達は集落へと入る。
すると、農作業らしきことをしていた農民のような格好をした女性が、オレ達の姿に気づく。
「あのー、すみません」
「ひっ!?」
オレが声をかけると、女性は明らかに怯えた様子で手に持った籠を落とし、顔面を蒼白にして後ろに下がる。
なんだろう、オレ達がよそ者ということで警戒しているのだろうか？
それにしてはやけに怯えすぎだが……そんなことを思っていると、女性は慌てた様子で頭を下げる。
「こ、この度のご来訪、誠にありがとうございます。で、ですが、今現在、我々が収穫できた作物はごく僅かでして……先月収めた分にも届いておりません……こ、これ以上お渡しすると、私達の集落もぜ、全滅してしまいます……ど、どうか、あと数日だけお待ちくださいますよう、何卒……！」
「え、いや、ちょっと待ってくれよ。何か誤解してないか？　オレ達はただの旅人なんだが」
「え？」
オレがそう告げると、女性は明らかに不思議そうな顔を向けてきた。

「旅人、ですか？　し、しかし……あなた方は人間、ですよね？　それなら、旅人だろうと私達の取り立てに来たのでは……？」
「取り立て？　どういうことだ？」
どうにも話が噛み合わないな。
そんなことを思っていると、集落の他の住人達も姿を見せる。
皆、遠巻きにオレ達を観察し、その瞳は例外なく怯えや恐怖の感情を秘めていた。
状況がイマイチ掴めず頭をひねるオレ達に、女性はかぶっていたスカーフを取る。
「……あ、あの……こ、これでお分かり、いただけませんか……？」
すると、そこに見えたものにオレは見覚えがあった。
「それは！」
スカーフの下にあったのは間違いなく、ファナの頭にあったものと同じ角である。
ということは、この集落にいる住人は皆、ファナと同じ種族か？
見ると、まるで江戸時代の農民のようなみすぼらしい格好の住民全員の頭に、例外なく角が生えていた。
「……は、はい。私共は全員『鬼族』でございます……ですので、人間様には逆らうことはできません……」

「『鬼族』？」
それがファナの種族なのだろうか？
しかし、人間に逆らえないとはどういうことだ？
戸惑うオレをよそに、隣にいたガルナザークが鼻を鳴らして前に出る。
「フンッ、ならば安心せよ。我は人間などという下等な種族ではない。今はこのような器に入っているが、本来の我が種族は魔物――その中でも最上位の『魔王種』だ。貴様らが怯える人間などと同じにするな」
「にゃははは！　それを言うならば私もそうなのだ！　ちなみに私の種族はサキュバス、魔人種なのだー！」
「ま、魔物？　魔王に魔人？」
ガルナザークとリリムの宣言を聞いていた鬼族の全員が首を傾げる。
どうやらこの世界には、魔物や魔王といった存在はいないようだ。
彼らは初めて聞く単語と、リリムが背中から広げた黒い翼と尻尾に、目を丸くしていた。
少なくともリリムとガルナザークについては、人間とは異なる種族であると理解できたようだ。
しかし、未だ残ったオレへの警戒心は薄れることなく、疑惑と恐怖の視線を向けてきていた。
「あー、まあ、オレはこの二人とは違って人間だけど、多分君達が怖がっている人間とは別だと思

うよ。その証拠にオレは君達から取り立てに来たわけじゃない。ただ話を聞きに来ただけなんだ」
「話……なんでしょうか？」
オレの説明に未だ納得がいっていないのか、先程の女性が恐る恐る尋ねる。
「その、この世界について教えてほしいんだ」
「は？」
どういうことかと戸惑う女性や集落の人々を前に、オレは正直に言った方がいいと覚悟を決める。
「オレの名前は安代優樹。この世界とは別の世界から来た人間なんだ」

【現在ユウキが取得しているスキル】
『金貨投げ』『鉱物化（龍鱗化）』『魔法吸収』『空間転移』『ドラゴンブレス』『勇者の一撃』
『ホーリーウェポン』『魔王の威圧』『デスタッチ』『武具作製』『薬草作成』『毒物耐性』
『呪い耐性』『空中浮遊』『邪眼』『アイテムボックス』『炎魔法ＬＶ３』『水魔法ＬＶ３』
『風魔法ＬＶ３』『土魔法ＬＶ３』『光魔法ＬＶ10』『闇魔法ＬＶ10』『万能錬金術』『植物生成』
『ミーナの記憶』

立ち読みサンプル
はここまで

第二使用　異世界ニジリアナ

「……別の世界から来た？」
オレの告白に、集落にいた鬼族の間でざわめきが走る。
まあ、それはそうだよな。別の世界から来たなんて、口で言っても簡単に信じてもらえるはずがないか。
さて、どうやって説明したものか。と、オレが頭を悩ませた瞬間であった。
「別の世界から来た、とおっしゃいましたが、もしやあなた様方はパラケルスス・フォン・ホーエンハイムと同じように、次元を越えてこの世界へ来たのですか？」
「え？」
思わぬ名前が出たことに顔を上げると、そこには一人の老人の姿があった。
「パラケルススのことを知っているのですか!?」
オレがそう言うと、再び鬼族の間でざわめきが起こる。